

風船と出会って少年は…

『赤い風船』

1956年 フランス映画 36分

監督/アルベール・ラモリス

主演/パスカル・ラモリス (監督の息子)

現在、全国で順次公開中



再見の機会を待ちに待った。著作権の問題もあったのか再上映されなかった。憧れ続けるうちにさらに期待は膨らむ。実現し、夢との再会は裏切られなかった。

半世紀以上前に世界中で話題になったフランス短編映画の名編『赤い風船』が、いま各地で上映されている。スタンダードサイズのカラー作品でたった36分。人間と風船の「友情」といえば、もうファンタジーの世界だ。だが、パリの下町を少年が真っ赤な風船を持って歩く姿を捉えるカメラは、まるで記録映画である。ファンタジーとリアリズムのまれに見る融合。そこから醸し出されるのは、生活感あふれる街の人々の雰囲気と合致した豊かで深くユーモラスな詩情である。これぞ映画詩、カンヌ映画祭でパルム・ドールを獲得しているが、いかなる大作や長時間ドラマも遙かに凌駕している。シンプル・イズ・ベストを実感する。

ある日少年は学校への登校途中、街路灯にからまった大きな風船を見つける。拾ってバスに乗ろうとするが、風船の持ち込みを拒否される。歩いて学校へ行くと風船は校内に入れてくれず、先生に叱られる。帰途、雨が降ってくる。雨にぬれてはいけないと、街を行く人々に風船だけを相合い傘にしよう。人々は親切だ。だが少年はずぶぬれ。風船は少年の優しい心を察知する。…そう、このあたりからファンタジーになってくる。紐を持たなくても風船は少年に従う。少年の自宅に入るのを遠慮して戸外で夜明けを待つ。外へ出掛ける少年に、風船はどこまでもゆらゆらとついていく。いたずらっぽくからかったりする風船。巧まざるユーモアが漂い、画面からおおらかさが浮き立ってくる。もう少年と風船は友達だ。誰も二人(?)の間を裂くことはできない。

街の悪ガキたちが不思議な風船をねらって奪おうとし始

める。少年は風船とともに路地から路地へと逃げまわる。おもちゃのパチンコが命中して風船はしぼむ。だが、見よ！一つの風船の死は、パリ中の風船を決起させる。あの街角、この家の窓、路行く子どもたちの手から離れて赤、青、黄、緑…、風船が少年に向かって列をなして集まってくる。愉快な奇跡である。少年は無数の風船を抱きしめながら、その浮力で空へ舞い上がっていく。

バスも学校も風船を排除した。悪ガキも少年と風船を敵視した。いま束縛や拘束から離れて、少年は自由になり、もうすべてから解放されたのだ。

セリフはほとんどないが、言葉以上に心情で受けとめることができる。自由を獲得した少年の将来や、彼の家族の気持ちを理詰めで考える必要はない。パリの上空をどこまでも昇天していった少年の解放と安堵の心を、観客はいつまでも胸に刻んで思い続けたいのだ。

生涯で何度も味わうことのできない、至福の映画鑑賞の時を持つことができる。DVDも発売してもらいたい。鬱屈した気分の時、自宅の小さな画面でもいい、私も風船と空へ飛んでいくことができるだろう。何ものにも代え難い安息と「酔い」が得られるに違いない。

同じくアルベール・ラモリス監督の『白い馬』(‘53)も併映されるようだ。こちらもカンヌで受賞した珠玉で、40分のモノクロ。

プロフィール

吉村 英夫 (よしむら ひでお)

1940年生まれ。映画評論家、愛知淑徳大学教授。早稲田大学卒業後、三重県立高等学校で教鞭を執る。34年の教員生活を経て退職、現在に至る。著書に『完全版男はつらいよの世界』『老いてこそわかる映画』などがある。近刊は『講義録・黒澤明を観る』。